7 月 28 日のウクライナ情報

安斎育郎

●ララ・ローガン「ウクライナのネオナチを支援するのはアメリカ」（再掲、2022年3月31日）

ウクライナのネオナチの問題は戦後ウクライナの重要な国家的課題になるとともに、それは国際的な問題になる。アゾフ連隊をの多くはウクライナ戦争を通じて捕虜となったが、その残党や、ネオナチ集団の薫陶を受けた子どもたちの世代を「脱ネオナチ化」するのはそう簡単ではないだろう。
https://odysee.com/@yokuni:5/20220330.LaraLogan--TheUnitedStatesSupportsUkrainianNeo-Nazis:8

●西側メディアのネオナチの取扱い（ロシア TV、2022 年 4 月 2 日）

ジェノサイド集団、愛国者集団、それとも…。
https://odysee.com/@Jano:7/RT01:7

●反ユダヤ主義の恐ろしさを示す、ネオナチの集会が行われる

フロリダでは、オーランドのデモでナチス・アトムワッフェン（＝「ナチ核兵器」）が市民を襲撃し、デイトナビーチではネオナチグループが爆破予告をするなど、ファシスト活動が活発化している。
https://twitter.com/norlowsky/status/1551666096796848128?t=2AbdT2-jFeMtgUhtpnBuAg&s=09

●ウクライナで起きている、本当のこと。家族の証言（2022 年 3 月 31 日）

https://mail.yahoo.co.jp/u/pc/f/message/AGAJZmQAABpLYt_bfQCzsK_6ex4

●「ロシア軍が来るのを待っていたわ」（2022年7月25日）

ウクライナの砲撃の中、リシチャンスクの女子児童は、ロシア軍のために絵手紙を用意していた。
https://twitter.com/GOrwell2022/status/1551392943751065600?s=09

●解放されたマリウポリの屋外コンサート（2022 年 7 月 24 日）

これは「ロシア制圧地」の現実です。
https://twitter.com/slightsight/status/1551097050984419328?t=2945p9xBz9vVIJdZgMDHuQ&s=09

●ウクライナ軍がロシアの MT-LB に爆弾を投下している映像（2022 年 7 月 25日）

ウクライナ軍のドローンからの爆弾投下でロシアの MT-LB（汎用軽装甲牽引車）を破壊とされていた映像。
https://twitter.com/littlemayo/status/1551680284864552963?t=kVlEhUNecbH2fyDPvdBfkw&s=09

※安斎注：本物映像に見えますか？戦車は何にも壊れていないし。

●米ランド・ポール議員がウクライナのブラックリストに載った訳（2022年5月13日）

ランド・ポール議員はウクライナへの 400 億ドルの追加支援可決に反対。 チャック・シューマー（ニューヨーク州選出の民主党の上院議員）は修正を拒否、ランド・ポールは異議を唱え、「私の宣誓は合衆国憲法に対してであり、いかなる外国に対するものではない」。チャック・シューマーはマスメディアへの露出が多い政治家として知られ、共和党元大統領候補のボブ・ドールからは「ワシントンで最も危険な場所とは、チャック・シューマーとテレビカメラの間である」と評されたこともある。超党派連は、ポール上院議員が、「悪名高い腐敗したウクライナへの 400 億ドルの大規模な対外援助パッケージを監視なしで可決しようとするのを阻止したこと」に激怒している。
https://twitter.com/littlemayo/status/1524922003165024256?t=P_WEeFt4DbYyN_4TXqzmtg&s=09

●ゼレンスキー氏、側近の検事総長と情報機関長官を解任（）

ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領は7月17日、イリーナ・ベネディクトワ検事総長と情報機関「保安局」のイワン・バカノウ長官を解任した。両氏が管轄する機関で、計60人以上の職員が、ウクライナに侵略するロシアに協力した疑いがあり、責任を取らせたものだ。

ベネディクトワ氏は、露軍による戦争犯罪に関する捜査で先頭に立って情報発信し、ウクライナを訪問した米司法長官と会談するなど欧米各国とも連携してきた。今後、捜査に影響を与える可能性もある。

バカノウ氏はゼレンスキー氏の幼なじみで、2019年の大統領選で陣営を率いた一人だ。ゼレンスキー政権発足後、保安局トップに任命されたが、経験不足から手腕に批判も上がっていた。

ウクライナでは16日、ロシアに併合されたクリミアを担当する保安局の元幹部らがスパイ容疑などで拘束された。ロシアの特殊機関などに機密情報を渡したとされている。

5月末には東部ハルキウ州を担当する保安局の幹部も、侵略の対応を巡る「職務怠慢」を理由に解任された。露軍の激しい攻撃が続く東部や南部では、露軍の攻撃の標的選定に情報を与えているなどとして、ウクライナ当局が住民らを拘束する事案も相次いでいる。

イリーナ・ベネディクトワ検事総長

●ウクライナのスパイの間抜けたロシア・パイロットへの接近（2022年7月27日）

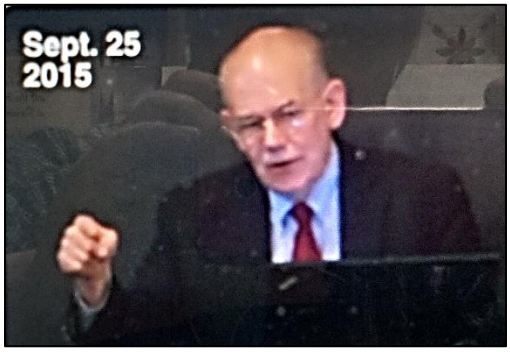
なんとも間抜けな「スパイ大作戦」の内幕ですが、訳文の中の「宇」＝ウクライナです。
https://www.youtube.com/watch?v=_tcz4Dz2KpQ

●誰も耳を貸さなかった 2015 年のミアシャイマー教授（2015年9月25日）

「西側はウクライナを安易な道（primrose path）に導いており、その結末はウクライナがボロボロになることだ」

https://twitter.com/ZUZUTANU/status/1549039568594571264?t=HX3WGWOXJn14Wu13TnEZxQ&s=09

※安斎注：ジョン・ミアシャイマー氏はアメリカの政治学者、国際関係学者、空軍軍人。シカゴ大学政治学部教授。国家が他国に対してパワーの拡大を試みる行為主体だと想定して安全保障を研究する攻撃的現実主義（オフェンシブ・リアリズム）の代表的論者。



ジョン・ミアシャイマー（2015年9月25日）

●ウクライナ戦争論（安斎育郎、再送）

（1）ウクライナ戦争の責任は誰にあるか？

アメリカのシカゴ大学政治学部教授で、元空軍軍人の政治学者ジョン・ジョゼフ・ミアシャイマー氏は、ウクライナ戦争の性格について歴史的事実経過を踏まえながら極めて明快に解説しています。

彼は、ウクライナ戦争の原因はアメリカ合衆国の側にあり、最も好ましい解決策はウクライナの中立化だと主張していますが、彼の見解は、多くの点で私の認識と一致しています。

日本を含む西側陣営の報道が、今度の戦争は「一方的なロシアによる軍事侵攻によるものだ」という認識をベースに日々繰り返され、子どもを含む戦災者の惨状が伝えられている中で、ややもすれば、「鬼のプーチン憎し、ウクライナ頑張れ、被災者や難民を救え」という感じ方に流れされがちですが、ミアシャイマー教授は、「戦争の原因を作ったのはアメリカ、戦争に勝利するのは大義のあるロシア、敗北するのは米ロの狭間で翻弄されるウクライナ国民」と明確に断じています。

（2）ブカレスト NATO 首脳会議（2008年）が発端

2008年4月2～4日、NATO はルーマニアの首都ブカレストで首脳会議を開き、ロシアと国境を接するジョージアとウクライナの将来的な NATO 加盟を認めました。出席していたロシアのウラジーミル・プーチン大統領は、NATO の旧ソ連圏への拡大に強い警戒感を示し、「強力な国際機構（NATO）が国境を接するということはわが国の安全保障への直接的な脅威とみなされる」と語りました。ウクライナとジョージアの NATO 加盟を強く推していたアメリカのジョージ・ブッシュ大統領にとっては、両国の加盟が合意できず「将来的な加盟」となったことは大きな痛手でしたが、後に、ドイツのアンゲラ・メルケル前首相は、ウクライナの早期加盟を阻止したことは妥当だったと回顧しています。

ミアシャイマー教授は、「ロシアはジョージアとウクライナの NATO 入りはロシアの存亡に関わる脅威であり、受け入れられないと主張した」ことに言及し、このブカレスト NATO 首脳会議こそが今回のウクライナ戦争の起源だと言い切っています。ロシア軍は、その 4 カ月後の 2008 年 8 月、ジョージアに軍事侵攻しました。

（3）ユーロ・マイダン・クーデター

2013 年から 14 年にかけて、ウクライナで政変が起こりました。事の始まりは親ロ派のヴィクトル・ヤヌコビッチ政権が EU との政治・貿易協定に仮調印していながらロシアの圧力などで署名を見

送ったことでした。

最初は限られた数の学生の抗議行動に端を発しましたが、2013年 12 月にはユーロ・マイダン（ユーロ広場、元の独立広場）での抗議集会は 50 万人に膨れ上がりました。当然のようにヤヌコビッチ政権は規制に乗り出しましたが、抗議行動の側にも過激な行動をとる人々が現れ、ウクライナは大きな社会的混乱に陥りました。

アメリカはこの機会をヤヌコビッチ大統領を政権の座から引きずり下ろし、米英金融資本の傀儡政権を樹立することに利用し、ネオナチ的極右集団やフーリガンをも動員したクーデター（ユーロ・マイダン・クーデター）を画策しました。バラク・オバマ政権のもとで実行されたこのクーデターを現場で指揮していたのがヴィクトリア・ヌーランド次官補（現バイデン政権の政治担当次官）で、ホワイトハウスで指揮をとっていたのがバイデン副大統領でした。

もしもアメリカがロシアと国境を接するウクライナに親米傀儡政権を樹立すればロシアへの軍事的圧力になるだけでなく、ウクライナ支配によりロシアと EU を結ぶ天然ガスのパイプラインを支配して EU とロシアを分断し、ロシアから EU 市場を奪い、EU もロシアというエネルギー資源供給地を失ってアメリカ依存性を強めざるを得なくなるという、一石何鳥ものメリットが見込めます。

EU はこの混乱を話し合いで解決しようとしましたが、これを知ったヌーランドは激怒し、ウクライナ駐在大使のジェオフリー・パイアットに電話で「EU なんかくそくらえ」（Fuck the EU）と話しました（その会話は 2014 年 2 月 4 日にインターネットにリークされました）。

‘Fuck the EU’: US diplomat Victoria Nuland’s phonecall leaked - video | US news | The Guardian

2014 年 2 月 18 日からデモは全国的蜂起に変わり、首都キーフでは棍棒・ナイフ・チェーンなどを手にしたネオナチの活動が活発化し、石や火炎瓶を投げ、ピストルやライフルで銃撃を始めました。翌 19 日、政府と野党勢力はデモ隊との休戦に合意したものの、極右民族主義派の右翼セクターや全ウクライナ連合「自由」（スヴォボーダ＝極右・反ユダヤ政党）系列などのデモ隊は合意案を拒否、銃器を振り回し、武力で議会を掌握しました。2月22日、危険を感じたヤヌコビッチ大統領は首都を脱出、議会を占領した野党が大統領を解任しました。

ロシアは、折から 2 月 7 日～23 日の期間、ソチ・オリンピック開催中で事態に対応しにくく、ネオナチはそれも考慮して過激な活動を行なっていた可能性も指摘されています。ウクライナでのこうしたテロ活動を指揮していたのはアメリカで、活動的な反政府抵抗グループのメンバーには1日200ドルの日当が支払われ、外交ルートを通じてキーウのアメリカ大使館に送られた資金で賄われました。ヌーランドは「ウクライナ民主化」のためにアメリカが50億ドルを費やしたと証言しています。先の電話の会話でヌーランドは次期政権についてアルセニー・ヤツェニュクを候補に挙げていましたが、実際、クーデター後、彼は首相に就任しました。

ユーロ・マイダン・クーデターで親ロ派の大統領ヤヌコビッチが国外脱出すると、ロシアは強引な手に打って出ました。クリミア半島を接収し住民投票のすえにロシア領と宣言したのです。ウクライナの領土と見なされているクリミア半島を構成するクリミア自治共和国・セヴァストポリ特別市をロシア連邦の領土に加えるとする宣言で、2014 年 3 月 18 日にロシア、クリミア、セヴァストポリの 3 者が調印した条約に基づいて実行されました。併合宣言は、クリミアとセヴァストポリでの住民投票⇒独立宣言⇒併合要望決議⇒ロシアとの条約締結という段階を踏んで行われましたが、国連やウクライナ、そして日本を含む西側諸国などは主権・領土の一体性やウクライナ憲法違反などを理由としてこれを認めておらず、併合は国際的な承認を得られないまま今日に至っています。

しかも、事態はクリミアだけに留まりませんでした。ウクライナ東部のドネツク、ルハンスク（ルガンスクとも表記）2 州で親ロ派の武装勢力が蜂起し、独立を宣言したのです。ウクライナ政府は防衛軍を新たに編成して抗戦し、ユーロ・マイダンで名をあげたフーリガンと極右の連合体であるアゾフ大隊も含めて、様々な極右団体も武装化して東部紛争の最前線に現れたので、この地でその後何年も続くことになる内戦（東部紛争）が始まりました。親ロ派住民に対するウクライナ軍の攻撃は熾烈を極めました。

（4）クーデター後

マイダン・クーデターを受けて2014年5月に行われた大統領選挙では、菓子メーカーのオーナーでウクライナ有数の富豪であるペトロ・ポロシェンコが当選しましたが、彼はヤヌコビッチ大統領らの下で国家安全保障・国防会議メンバー、外相、経済発展・貿易相などの政治経験をもっていました。ウクライナ国立銀行の理事長もつとめたポロシェンコは、ヤヌコビッチ政権を崩壊させたウクライナ反政府デモを財政面で支援していたとも報じられています。

アメリカ政府は 2014 年以降、ウクライナ政府に 20 億ドル相当の軍事支援を提供し、ネオナチ主導と言われたアゾフ大隊が防衛軍に参加しても意に介さず、議会が彼らに対する支援を禁止した後も援助を打ち切りませんでした。アゾフ大隊は、もともとはアゾフ海沿岸のマリウポリを拠点とする準軍事組織でしたが、現在はウクライナ内務省管轄の国内軍組織である国家親衛隊に所属しています。アメリカの駐ウクライナ大使パイオットは、マイダン運動を「民主化運動」、これに反対する勢力を「テロリスト」と呼ぶことを憚らず、交渉を通じた平和的解決には関心がないと言われます。

（5）ゼレンスキー登場

ウクライナでは、2015 年からテレビ「1+1」でウォロディミル・ゼレンスキーが主演する政治風刺ドラマ『国民の僕（しもべ）』が放映され、一介の歴史教師がふとしたことから素人政治家として大統領に当選し、権謀術数が渦巻く政界と対決する姿をユーモアを交えて描き、大評判となりました。このドラマの絶大なる人気によって、国民の間には、現実の大統領と主人公のゼレンスキーを重ね合わせ、大統領選挙への出馬を期待する動きが起きました。2018 年、ゼレンスキーは期待に応えて政党「国民の僕」を立ち上げ、翌年の大統領選への出馬を表明しました。大富豪イーホル・コロモイスキーの支援を受けた彼は、ポロシェンコとの決選投票で73．2％の得票を得て当選し、実際の大統領になりました。ゼレンスキーの政党「国民の僕」は、現有議席ゼロから 424 議席中 240 議席以上の単独過半数を占め、第1党になりました。

しかし、ウクライナが抱える経済、汚職、紛争といった難問を解決することが出来ず、支持率は下がっていきました。ウクライナの汚職と腐敗はアフリカの発展途上国並で、腐敗認識指数（Corruption Perceptions Index）の国別ランキングでは、2021 年度は 122 位で、エジプトやアルジェリアやフィリピンと同程度でした。軍も例外ではなく、ウクライナの新聞報道では、平均して国家予算の30％程度が汚職で消え、とくに国防予算の使い方が酷く、ある軍事工場は 100 ドルの注文を受けると 81 ドルまでを盗んでいたと伝えられています。

親ロシア派勢力が優越しているドネツク、ルハンスク両州での内戦については、2015 年 2 月、ベラルーシの首都ミンスクで行なわれたロシア、ウクライナ、ドイツ、フランスの首脳会談で停戦に合意（ミンスク合意）されましたが、ゼレンスキーは「主戦論」を唱える民族派の猛反発に直面し、「ミンスク合意」を破って自らも失地回復を唱えるように方針を転換しました。

世界の多くの国々がクマに襲われても果敢に戦うゼレンスキーを称賛し、我も我もと「うちに来て下さい」と招待し、褒め称えました。ゼレンスキーは「武器を与えて下さい」とアピールしていますが、和

平よりも戦闘継続の道を突き進むベレンスキー大統領の方針決定の下でたくさんのウクライナ人が犠牲になりつつあります。戦争の原因は「アメリカがウクライナに NATO 加盟を勧めたこと」であり、そのことを不問にしてこの戦争をやめさせることは難しいでしょう。

(6)クマの目を突いたのは誰か？

クマが暴れたら抑えなければなりませんし、ケガを負った人は手当てし、助けなければなりません。だが、クマの目を突いて暴れさせた者がいるとしたら、いや、もっと酷いことは、クマを暴れさせるために目を突いた者がいるとすれば、それこそ重犯罪人として断罪しなければならないでしょう。

NATO は2008年以来、ロシアというクマを突っつき続けてきました。クマは「痛いからやめてくれ」と言いましたが、攻撃はだんだんひどくなり、みんなで取り巻いて、「お前なんていつでもやっつけられるように傍にいつでも致命傷を与えられるハンターを雇ったからね」と脅しました。そして、ウクライナはすぐ近くの黒海で2021年 6 月～7月に NATO と合同軍事演習を行い、イギリスの駆逐艦やアメリカの爆撃機など軍艦約 30 隻と航空機 40 機を参加させました。「なぜこの時期にこの場所で？」「これは挑発でなくて何でしょう？」―そう考えることは奇異なことではありません。